

膝蓋大腿関節に発症した離断性骨軟骨炎に対する治療経験

○神頭 誠 (かんと う まこと) (MD), 中山 寛 (MD), 神頭 諒 (MD), 吉矢 晋一 (MD)

兵庫医科大学 整形外科学教室

【目的】

膝蓋大腿関節 (PF 関節) に生じる離断性骨軟骨炎 (OCD) は稀である。その治療法は病期, 年齢, 発生部位などを踏まえて選択されるが, 症例数が少なく予後や治療方針は定まっていない。当科で経験した PF 関節 OCD, 5 例 6 膝について報告する。

【対象と方法】

対象は 2013 ~ 2015 年に当科受診した, 5 例 6 膝 (男性 5 例) で, 平均年齢 14.5 歳 (13 ~ 16 歳), 全例骨端線閉鎖前であった。項目は病変部 size, 部位, 病期分類, 治療方法, 治療経過, PF 関節アライメントについて検討した。

【結果】

size は平均 2.7cm^2 ($1.1 \sim 4.8\text{cm}^2$) で, 膝蓋骨 1 例, 滑車部 5 例であった。Bruckl 分類で stage1 が 1 膝, stage2 が 4 膝, stage4 が 1 膝であり, 治療方法は保存療法 3 例, drilling + lateral release が 1 例 2 膝, 遊離体摘出術が 1 例であった。手術までの期間は症状出現から平均 13 ヶ月, スポーツ復帰までは症状出現から平均 14 ヶ月であった。経過は 4 例で症状改善し, 1 例は疼痛残存し経過観察中である。Patella height は平均 1.41 ($1.16 \sim 1.79$), TT-TG は 12mm 以上をアライメント不良とし, 3 例 4 膝が該当した。patellar tilt は平均 6.3° ($1 \sim 13^\circ$) であった。

【考察】

PF 関節に OCD が生じる risk factor としてスポーツなどによる繰り返す剪断力や関節不適合などが考えられている。当科の症例でもスポーツ活動, アライメント不良は PF 関節 OCD の risk になる可能性が示唆された。治療法に関しては, 進行度により選択される事が多い。今回 5 膝が stage2 以下であり, 保存療法やドリリングで疼痛改善, 4 例がスポーツ復帰可能であった事から stage1, 2 の症例は予後良好であると考えられる。